

菊 会報

第一号

発行・編集

鹿児島県教頭会

〒892-0836

鹿児島市錦江町2-1-16

鹿児島県公立小・中学校

教頭会会館県教頭会事務局

TEL 099-226-8268

FAX 099-822-5580

会長就任のあいさつ

鹿児島市立東谷山小学校

会長 長船 祐介

五月九日に開催されました委員・代議員会におきまして承認をいただき、会長に就任することになりました。県下の教頭先生方のことを思い浮かべますと責任の重さを強く感じております。微力ではありますが、精一杯取り組んでいきたいと思っておりますので、皆様の御支援と御協力をよろしくお願い申し上げます。

本年度の鹿児島県小中学校教頭会の会員数は七四六名、うち新任の教頭数は三十一名です。この三年間で五十名近く減り、新任教頭数は昨年に比べ半分近くに減っています。

また、平成二十四年度の全国公立学校教頭会調査報告を見てみると、小・中学校ともに休日の出勤日数や学校施設開放の管理や破損等の対応をしている割合、さらに小学校では地域行事に関わる休日等の参加日数が

であると思います。

そこで、本会では次のようなことに重点を置いて進めて参ります。

第一に、第四十七回研究大会が多くの会員のみなさんにとって充実したものとなるように、提言や指導助言、役員としてお手伝いいただく先生方のお力を借りながら進めて参ります。

二つ目に来年度から教育事務所に合わせて各地区の組織や研究体制が変わります。新しい組織や研究体制への移行がスムーズにできるよう、各地区の委員・代議員、研修部長さん方のお力を借りながら進めて参ります。

三つ目に、全国大会や各種研究会への積極的な参加等を通して広く情報を収集し、県教頭会ホームページの定期的な更新等を通して会員のみなさんへの情報提供を進めて参ります。

四つ目に、教頭の処遇改善に向けて調査活動を進めると共に、県教育委員会や県連合校長協会、全国公立学校教頭会等の各種団体との連携を強化し、要請活動を進めて参ります。

五つ目に、県教頭会の活動を縮小することなく、来年度以降の組織変更に合わせて活動費の見直しを進めて参ります。

さて、来年度から第十期の研究が始まります。また、前にも触れましたが、来年度から各地区の研究体制が教育事務所単位に変更になることについて、昨年度から各地区の研修部長

さん方を中心に取り組んでいただき形ができあがりつつあります。本年度は第九期の研究を深めながら第十期の準備をすることになります。さらに、第十期二年次の平成二十七年会は、九州公立小・中学校教頭研究大会が鹿児島で開催され、鹿児島島のほぼ全ての地区から提言をしていただくことになっていきます。二十七年研究大会は開催時期が早まることから例年と違い原稿の最終提出期日が早くなります。そのため、平成二十六年度の研究内容を加除修正したものを出していただくこととなります。つまり、発表内容の大部分は平成二十六年度のもをを発表することになります。そのような点からも来年度の研究に向けて、本年度の準備が大切になってきます。各地区では、研究体制の確立や第十期からの研究内容の検討など大変ではありますが、教頭先生方の繋がりを活かしながらお力をお貸しいただきたいと思っております。

最後になりましたが、第四十七回県教頭会研究大会が県下の全会員が参加して十一月に開催されます。今年度は第九期のまとめの年にあたり、例年どおり六課題七分科会(二十八)の提言をいただくことになっています。各地区では提言者を中心に研究論文の仕上げに向けて取り組んでいただいているところだと思います。また、論文の作成に当たっては、県教育委員会をはじめ県連合校長協会、関係機関の御指導をいただいておりますことを

みなさまにお知らせすると共に、御指導いただいております関係機関の皆様にも厚く御礼を申し上げます。研究大会当日が内容の濃い充実した大会の場となりますように会員の皆様には、重ねて御支援・御協力をお願い申し上げます。

様々な難局を乗り越えるためには、やはり教頭先生方の多くの経験と横の繋がりが大切になって参ります。教頭会は今後も、広く会員の皆様の声を聞かせていただき、それを活かしながら相互の連携をより深め充実した活動を進めていきたいと思っております。平成二十五年度の各学校の教育活動が活発にそして安全に営まれますことを祈念致しまして御挨拶とさせていただきます。



随想

二年目の夏に思ふこと

薩摩川内市立藤川小学校 喜島 宏明

教頭として二年目の夏を迎えた。真夏の日差しを浴びながら、プールからは水泳記録会に向け子どもたちを指導する先生の声。その隣では、大粒の汗を流しながら校庭の芝生を整備する先生の後ろ姿。全校児童十名の小規模校である本校は、先生方の力により支えられている。

昨年教頭職に就いた。新たなスタートを切り、意気揚々と今までの経験が生かせるものだと思えていた。しかし、現実はその甘くない。波のように押し寄せてくる仕事をこなすのがやっと。綱渡りをしているようだった。

そんな自分の大きな支えとなったのは、近隣の小中学校の教頭先生方だ。相談をもちかけると自分の仕事も抱えながら、貴重な時間を割いて、丁寧にアドバイスをくださる。とても心強かった。

飲み方の席では、教諭時代の思い出話に花が咲く。子どもたちや先生方の頑張りたたえを忘れない所は、さすが教頭先生だ。しかし、時には自分の苦労話もされる。様々な経験談が心に染みるがそれ以上に元気をもらうことが多い。それらの経験が、今の先生方の支えとなっているからだと思う。

ある先輩からいただいた葉書に、「教頭職は激務だが、やりがいのある

仕事」とメッセージが添えられていた。二年目の今、やりがいを見つければいい余裕はないが、これまで支えていただいた思いを少しでも返せるよう精進したい。

まず、子どもたちが心と体を磨き、伸び伸びと学校生活を送る環境作りと、情熱を注いで指導される先生方の支えになることから始めたい。



『言葉の習慣』

著者 佐藤伝
学研パブリッシング

三原 秀樹

今回、原稿の依頼があった時、はたと困ってしまった。というのも、元来本を読まない私にとって、人に勧める本などと言うものが存在するわけもなく、あわてて家中の本を物色する次第であった。

しかし、引き受けたからには、少しでも参考になるようにと次の本を選んでみた。佐藤伝著の『言葉の習慣』という本である。

この本の売り言葉は、「言葉が変われば、人生が変わる！」である。はたして、そうなのであろうかと思いつつながら読み進めると、次のように書いてあった。「私たちが口にした言葉は、『潜在意識』に取り込まれ、そのとおりの現実を作り出していきます。いい言葉を使っていると、またそういう言葉を使いたくなるような、幸せな出来事がどんどん起ります。逆に、悪い言葉を使っていると、またそういう言葉を使ってしまうような、イヤな出来事が起こります……。」と。

確かに私たちの回りには、二言目には他人の悪口や上手くないことの原因を他人のせいにする人がいる。

不平ばかりを言っているうちに、そうした言葉が身に付いてしまったのかもしれません。そうしたら人についていくのでしょうか。結果は自ずと知れたことです。人は離れていき、何事もうまくいけなくなり、結果、また、不平不満を言うようになる。なるほど納得です。

私たち教頭は、学校経営の補佐という立場にあります。経営していく際には、職員への働きかけ、言葉かけは大変重要です。やる気を出させるのも、削ぐのも「言葉」の使い方一つなのかもしれません。

経営の在り方を問うとき、同時に自分の言葉遣いに目を向けてみることも大切なことでしょう。この本を参考に、今の自分を振り返ってみたいと思っています。



教頭として柁城小学に赴任して、二年目を迎えた。

本校でひとときわ輝いているのが柁城親睦委員会(親父の会)である。今年で発足二十五周年を迎え、現在の会員数は四十名を超えている。私も会員の一人である。子どもたちのために多岐にわたる活動を行い、学校の教育活動にも大きく貢献している。

「やる気、元氣、根氣」を合い言葉に、「たぎる柁城の風」を吹かせている。

たぎる柁城の風が吹く

始良市立柁城小学校

平 千力

自由題

鹿児島市立吉野小学校

野網 啓司

今、思いつくこと

私はこれまで教頭として三校の学校を経験してきた。教頭九年目を迎え、いつの間にかベテラン教頭の仲間入りをしている。教頭として何ができているのだろうかと反省することも度々ある。

児童の心身ともに健全な成長を支える根本は家庭であり、それを取り巻く地域である。学校はそれを方向付けたら、支えたりするものである。ということも思っている。そこには当然、

本会はPTA組織に位置付けられており、月一回の定例会、柁城綱引き大会の進行と審判、親子キャンプ、運動会準備・警備・駐車場整理、蔵王岳登山等活動をあげるときりがない。

「おぎおんさあ」にも締め込み姿で御輿も担いでいる。(なお、親睦委員会はホームページを立ち上げており、検索していただくと活動が一目瞭然なので御覧いただきたい。)

各学校にも親父の会はあると思う。本校でも、親睦委員の背中をみて子どもたちは元気に育っている。特に、PTA会長や親睦委員長は、それぞれの行事の企画立案のため、よく学校に訪れる。頼りになる存在

学校と家庭・地域との信頼関係がなければならぬ。

新採の頃、子ども会でも人形劇に取り組んでいる地域の担当になった。毎月土曜日、輪番で家庭に集まり、練習を行った。その後、懇親会が毎回のように行われた。若造だった自分を一人の先生として大切に扱ってくれた。大したことでない自分を一人前の教師に育ててくれた。大げさかもしれないが今の自分があるのはその地域の方々がいたからだ。と今でも感謝している。

教頭としての役割の中に学校職員をまとめるのもちろんのこと、地域をまとめる(溶け込む)ことがある。



である。いつも前向きで、私自身、この一人に大いに元氣付けられ毎日を過ごしている。「たぎる柁城の風」を吹かせている二人である。

私も、風を吹かせ、熱く頑張っていきたいと思う。



地域の行事に参加したり、飲み方を開いたりする中で、もっと多くの若い職員に参加してほしいと思うことがよくある。保護者との信頼関係を築く場をもっと積極的に持ってほしい。現任校は積極的に参加する者が多い。とても頼もしい。

これからの世の中を背負って立つ人材を育てる以上、自分自身そして家族を大切に教育活動を行ってほしい。

新任教頭雑感

教頭として燃える思い

指宿市立指宿小学校

谷末 博隆

本校は、創立百四十三周年を迎えた全校児童数二六四名、校内に湧水による小川がある自然豊かな学校である。赴任して初日、「こんにちは。新しい教頭先生ですか、よろしくお願ひします。」

偶然、居合わせた子どもたちが、笑顔いっぱい迎えてくれた。新任教頭として赴任して以来、子どもたちの姿を直に目にしながら職務を遂行できる日々を幸せに感じている。保護者や地域の方々の学校に対する期待、それに応えようとひたむきに真心を込めて指導に当たる職員と共に過ごしていると、「全ては子どもたちのために」自分ももっと頑張らなければと自然に燃えてくる。

「チーム力でチェンジ」今年度、校長が学校経営を進めるに当たって、示したキーワードである。教育の効果は個人の頑張りだけでは十分に得られない。学年においては担任間の連携、共通実践を充実させるようにしている。そのために、教頭として、職員同士を「つなぐ」ことを心がけていますね。「今日の板書はとっても



分かりやすかったですね。」「先生の指導のおかげで、子どもたちが伸びていますね。」等、気付いた職員の頑張りについて、本人には勿論、他の職員にも語るようにしている。また、なるべく休憩時間や放課後等の雑談と交えながら伝えることを意識している。かつて仕えた上司は放課後、施設しに回ってきた際、よく職員を褒め、励まし、結果、職員間をつないでくれた。優れた実践をあの人から学びたい。この学校で明日からも頑張りたいと思えた。教頭として燃える思いを、さらに熱くし、邁進したい。